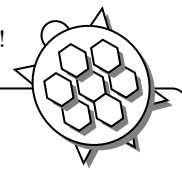


亀さん通信

朝晩はめっきり涼しくなりましたが、いかがお過ごしでしょう？

亀のように歩みは遅くとも、『お金力』をしっかり・確実に身につけていただく【亀さん通信】第156号の発信です！



鬼に笑ってもらいましょう！

先日、各所で話題になっている(?)「**未来の年表 ~人口減少 日本でこれから起きること~** (河合雅司著)」を読みました。人口が減少していく過程においては、社会も大きな変化を余儀なくされ、私たちの家計にも多大な影響を及ぼします。今回は、同書が鳴らす警鐘から日本の未来に思いを馳せてみましょう。

同書は国立社会保障・人口問題研究所が5年ぶりに改訂した「**日本の将来推計人口(2017年)**」の最新データから、日本の未来図を描いたもの。人口減少をもたらす**出生数の減少、高齢者数の増加**、そして社会の支え手である**勤労世代の減少**をこのまま放置すれば、日本は取り返しのつかない状況に追い込まれると指摘しています。例えば…

■2020年 女性の半数が50歳以上 ■2024年 3人に1人が65歳以上 ■2027年 輸血用血液が不足 ■2033年 3戸に1戸が空き家
人口の将来推計に基づく諸現象の予測は、よくある未来予想とは異なり、極端に外れることはないと言いますが、それには私も同意します。では、出生数の減少について具体的に見ていきましょう。

2016年の年間出生数は97万6,979人に留まり、初めて100万人の大台を割りました。戦後のピークは1949年の269万6,638人ですから、70年弱にして3分の1近くまで落ちたこととなります。ですが、真に懸念すべきは出生数が100万人を割ったことではなく、今後も**出生数減少の流れが止まりそうもない**こと。つまり人口減少の本番はこれからなのです。少子化を測るバロメーターに合計特殊出生率(1人の女性が生涯に出産する子供の平均数)があります。終戦間もない1947年には4.54でしたが、2016年には1.44まで低下。現在の人口規模を維持するには、**2.07の出生率**が必要です。「1」台であるということは、どの両親からも1人しか生まれない計算になり、世代の人口規模は半減します。現実には結婚しない人等もいますので、現状の1.44がいかに**危機的水準**にあるかが分かります。ちなみに1.00と1.99では何が違うのかと言えば、後者の方が出生数の減るスピードが遅くなるということ。ところで、安倍政権は結婚して出産したいという希望が叶った場合の出生率を国民希望出生率とし、それを1.8まで回復させることを目標にしています。もうお分かりですね。要は2.07まで回復させることは厳しいから、せめて**人口が減る速度を抑えよう**というわけなのです。

ところが、そうした努力もあまり期待できません。実は出生率が改善したとしても出生数は増えないから。それどころか、反対に減っていくのです。何故なら、これまでの少子化の影響で**未来の母親となる女兒の数が減ってしまっている**から。実際に過去の数値を見ると、出生率が過去最低だったのは2005年の1.26ですが、2016年は1.44なので0.18ポイント改善しています。しかし、年間出生数で比べると8万5,551人も減っているのが実状。日本社会は**少子化がさらなる少子化を呼び起こす悪循環**に陥っているのです。

2015年時点で1億2,700万人を数えた総人口が、40年後には9,000万人を下回り、100年も経たぬうちに5,000万人ほどに減る。これほど急激に人口が減るのは世界史において類例がありません。人口減少に伴う日々の変化というのは極めて僅か。影響を感じにくいのがゆえに**人々を無関心にする**。それがこの問題の難しさなのです。ゆっくりとではあるが、真綿で首を絞められるように、確実に日本国民の暮らしが蝕まれてゆく。この事態を著者は**静かなる有事**と表現しています。では、私たちに何ができるのか?はっきりしていることは、**成り行き任せは最悪の選択**であるということ。準備して何事もなかったらよし、いざ事が起きても無難に対応できたならば、それもまたよし。想定し、準備し、それでもなお力及ばずであったなら諦めもつくというもの。来年のことを言うと鬼が笑うと言いますが、大いに笑ってもらおうじゃありませんか! (笑)

気づけば、今年もあと3ヵ月。今一度ふんどしを締め直さねば!

㈱亀山保険事務所 亀山裕弘(㊟) 1級ファイナンシャル・プランニング 技能士 0575-28-2768 info@kameyama-hoken.com

この本の素直な感想は、来るべき未来に対して何の備えもなければ絶望あるのみ 刺激的な言葉が並んでいますが、長年に亘る放漫な国家運営 少子高齢化という問題は生半可なことでどうにかなるようなものではない。もちろん国民の奮起によって起死回生の一発が出る可能性は否定しませんが、そうした希望的観測は持たないほうがよいように思われます。いたずらに危機感や恐怖心を煽るつもりはありませんが、現実をありのままに見た素直な感想です。

日本の行く末を憂う話は今に始まった話ではありません。私の記憶では ググって 90年代の後半に日本経済新聞に「2020年からの警鐘」と題して連載 その当時は私も バブル崩壊の痛手を負っていたとはいえ、再び日本は復活だろうと安易に考えていましたが、その後日本を取り巻く問題に触れ、情報収集するにつれ これはかなりまずいことになっているのではと考えを改め、得体の知れない未来への不安・恐怖を感じ

ですが、今に至るまで、結局何も変わっていないのが実状 現実問題として、どれだけ政治家に文句を言ったところで、その実態は国民全員が直接、間接の既得権益者ですから、どのみち「総論賛成・各論反対」にしかならず、その構造を変えることなどできません。それでズルズル来たのがこの国の歴史です。

成り行き任せは最悪の選択です。準備して何ごともなければいいし、備えておいて、いざ、事が起きても、無難に対応できたならば、それもまたよし。想定し、準備をし、それでもなお、力及ばず、であったなら、諦めもつくでしょう。けれども、成り行き任せに生きた末に生まれる後悔、絶望、破滅だけは、少なくとも私（鮎谷）は絶対にしたくはありません。

いったん国や組織に預けている人生の主導権を取戻し、本当に安心・安全をもたらしてくれるものは何かのかを考えてみてはいかがでしょう。

北朝鮮の 著者が呼ぶ「静かなる有事」 衆議院選挙 来年のことを言うと鬼が笑う 笑わせておけばいい

年配者の中には「自分たちは“逃げ切り世代”だから関係ない」と決め込んで、人口減少などに無関心な人も少なくない。誰もが決して逃げ切れないことに気づくはず。

言うまでもなく、人口が激減していく過程においては社会も大きな変化を余儀なくされます。スカスカになった日本列島の一角に、外国から大量の人々に移り住むことになれば、武力なしで実質的に領土を奪われるようなものです。